

---

# 学園黙示録-DEAD or ALIVE-

maria

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園黙示録 - DEAD or ALIVE I

### 【Nコード】

N9477M

### 【作者名】

maria

### 【あらすじ】

学園黙示録の二次創作

## 学園黙示録を元に

桜満開の春。

俺、みながわやまと皆川大和は無事に高校三年生に進級。

決して優秀とは言えない頭で、何とか乗り越えた大きな壁。

それと共に俺に襲いかかってきたのは、受験生という名の重荷。

将来の夢なんてある訳のない俺の人生は、ちっぽけなものに違いな  
い。

優れた才能がある訳でもない。

こんなどうしようもない人生を送る俺にとって今一番足りないもの  
は『刺激』だ。

平凡で何ひとつ不自由のない生活。  
俺には、それが退屈で仕方ない。

そんなことを簡単に言ってしまったら、贅沢なように思われるかもしれないけれど。

「何か楽しいことねえかな…」

保健室のベッドで仰向けになりながらぼーっと天井を眺める。

所謂『現実逃避』。

このつまらなくて、平凡な生活に飽き飽きしている上に面倒くさいことから逃げる。

都合がいいと言われたらそれまで。

俺は大きく息を吐くと勢いをつけて重たい体を起こした。

真っ白な布団とカーテン。

「鞠川センス、俺もういくわ」

「ええ？まだ授業終わってないわよ」

校医の鞠川静香先生。

健全な男子高校生としては、とても目のやり場に困るようなナイスバディ。

オマケにこの天然っぷり。

周りの男たちがほっとく訳がない。

その反面、俺はそこまで興味がない。

確かに魅力的ではあるけれど、それ以上に何かを抱くことはない。

「もう元気になったから、じゃ」

一方的に話を押し切り、フラフラと保健室を後にすると授業中とだけあって静かな廊下。

このまま教室に戻っても担任にしつこく問い質されるだけ。

授業が終わるまで時間を潰すか。

屋上で一眠りしよう

そう思い立って歩き出した時だった。

たまたま通りかかった人物。

ものすごい形相で走り去って行った。

あれは、後輩か？

見かけない顔だった。

同じ学年ではないはずだから、少なくとも後輩に違いがないのだが。

「同じく授業をサボるヤツもいるんだな」

その時、気づくはずがなかった。

何が起きようとしているか。

『終わり』が始まろうとしているなんて

屋上について景色を眺めるでもなく、ドアを背にして座る。

もう、さすがに誰も来ないだろう。

気兼ねなく寝れる、と心底安心して目を閉じた時に異変が起きた。

「全校生徒・職員に連絡します！」

何とも騒がしい校内放送だった。

いつもと何かが違う。

それは明らかだった。

ただならぬ異変を感じた俺は、眉間にしわを寄せて耳を澄ました。

「現在校内で暴力事件が発生中です。生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください！！」

まさか。

一瞬笑いが込み上げた。

何かの冗談か？ドッキリか？

そう思えた俺はまだ、呑気でいられたんだ。



しかし、そんな俺を恐怖に導くには十分な程の奇声が学校中に響いた。

「ギャアアアアッ」

「おいおいおい…」

まるで、テレビや映画で見た残虐なシーンが浮かぶようなリアルな奇声。

当たり前だ、現実に行き始めているのだから。

俺は自然とその場に立ち、何を思い立ったのか無我夢中で教室を指した。

その間にも、放送は途絶えない。

「あつ…助けてくれっ助けてくれっ、たすけっひいっ…痛い痛い痛い痛い！！！」

耳が痛くなる。

気も遠くなりそうだ。

俺は必死にただただ教室へ向かう。

こんなに全速力で走ったのは久しぶりなのではないだろうか。

「助けてっ死ぬっ…ぐわあああ！！！」

その言葉を最後に何も聞こえなくなった。

その途端、頭に過ぎってほしくない言葉が浮かんできた。

死んだ。

怖いくらいの静寂。

俺は足を止めなかった。

早く教室に

そう思っていた矢先、パニックに陥った生徒たちが一気に廊下に押し寄せてきた。

トトトトト

「おらっ!!」

「どけっ!!」

俺は流れに逆らうようにして廊下を進み続け、やっとの思いで教室に着いた。

廊下から響く様々な声と足音。

外に逃げようとする皆のおかげであっという間に俺の視界に映る人影はない。

頼りにするべき教師がない。

始めからアテには、していない。

「…何だっ てんだよ」

勿論、この時の俺は冷静さを失い校内放送の内容を鵜呑み。

だから暴力事件が起こった、としか考えていなかった。

それにしても、異常なのだ。  
この光景が。

ふと足音が後ろからした。

敏感になっている今の俺は、素早く反応して振り返った。

「なんだ…お前か、びっくりさせんな」

振り返った先にあっしたのは、見慣れた姿。

「大和、授業サボったてたる？おかげで搜したよ…それよりマズイぞ」

曇った表情を見せたのは、同じクラスで仲の良い斎藤翔。さいとうかける

信頼を寄せているひとりだ。

しかしその翔の表情を見て、俺の嫌な予感が肥大していた。

ただの、暴力事件じゃない

「なあ、一体何が起こってる」

「お前を搜してる間に、嫌なものを見た。人が人を喰ってる」

まさか、そんなことが。

一度そう言われて誰が信じるものか。

「現実だぞ？有り得ないだろ…映画じゃあるまいし」

「外を見ればわかる」

翔は冷静だった。

俺は教師の窓からクラウドの広がる外を見下ろした。

その途端、俺は息をのんだ。

なんだ、この光景は。

血が辺りに落ち、翔の言葉通りだった。  
人が人を…喰ってやがる。

「俺たちも逃げないとヤバイぞ。とりあえず携帯は持て。いざという時の為だ」

校則違反ながらも俺と翔は携帯を持っていたので、ポケットにしま  
う。

俺はしばらくの間、グラウンドの光景が頭から離れなかった。

当たり前だ。

まるで、映画なのだ。

いや、映画よりもゲームだ。

視線を移した先に、クラスの野球部のヤツらのバッドが見えた。

野球のバッドをまさかこんな形で使うことになるなんて思ってもな  
かったな。

「翔、野球のバッド」

誰のかわからないが、今の状況で躊躇っている場合ではない。

生きるか、死ぬか。

究極の選択を迫られているのだ。

俺の言う『平凡で退屈な生活』はこの日を境にして、突如姿を消した。

\*\*\*\*\*

「何処に逃げるんだ」

教室を去り、誰もいない廊下を二人で走る光景は異様なものだった。

静かすぎる

「外に逃げたいところだが、人が溢れ返ってるし危険だ」



「じゃあ…」

と言いかけた瞬間

「いやああああ！！痛い痛いっ！！」

すぐ側で女子の叫び声と、聞き慣れない唸り声が響いた。

俺と翔は足を止めて、顔を見合わせた。

廊下を曲がつてすぐだ。

ここを曲がつてしまったら。

「翔！！ヤバイ、逃げるぞ！！」

俺は見てしまった。

一瞬だけ、一瞬だけだった。

手を引きちぎられ、血にまみれた女子生徒を見てしまった。

人間に群がる得体の知れない化け物。

あれは、現実なのか

今思えば『刺激』が欲しいなんて軽率な発言をした自分に罰が下ったんじゃないか。

そう捉えてしまってもおかしくはない。

俺は刺激を求めている。

平凡で退屈な日々にうんざりしていた。

だけど

俺と翔はその場を折り返し全力で廊下を走り抜けていた。

その間にも、静かだったはずの廊下や階段から聞こえる悲鳴が増えていた。

明らかに犠牲者が増えている。

喰われたヤツらは一体どうなる？  
そもそも、化け物がどんどん増える。

もしかして

俺の頭には、ありもしない予測が立てられ始めていた。

それはまさに、映画やゲームの世界。

「大和!!」

翔の呼びかけで我に返った俺の前に立ちはだかるのは、例の化け物。

肌は黒く、目は剥き出している。

首の肉がなく、血にまみれている。

数時間前まで普通に高校生として生活していたヤツが、途端にこんな姿に

今の俺たちに考えている暇はなかった。

「うおおおりゃああ!!」

金属バッドをこれでもかと振り上げ、力の限りに頭をかち割ってやった。

俺の推測が正しければ、死んでいるヤツを殺すには頭を潰すしかないはずだ。

少なくともゲームでは、そうだった。

化け物が弾き飛ばされて廊下に投げ出され顔が原型を留めない程に潰れた。

見るに堪えない。

俺はすぐに目を逸らして、バッドに付いた血を払った。

「はぁ…はぁ」

極度の緊張からだろうか。

差ほど体力を使っただけではないのに、息切れが激しい。

肩を大きく上下する。

初めて、人をバッドで殴った。

初めてでなければ困るのだが。

でもやはり、気持ちいいものではない。  
感触といい、余韻といい。

何とも言葉にできない。

「…大丈夫か」

「ああ、大丈夫だ。……化け物は人を喰う。喰われたヤツは化け物になる」

「喰われたら、化け物になるのか」

「確信はできない。でもそうに違いない」

廊下から眺める外の光景を見れば、納得はできるはずだ。

化け物がどんどん増えてやがる。

こんなにも増殖している証拠だ。

「それに化け物は既に死んでる。死んでるヤツ相手に無駄な攻撃は効かない」

「死んでるヤツを倒すには…」

翔が言葉を濁らせた。

俺は、ふっと笑みを見せた。

「大丈夫だろ。足や手がなくても動いてるヤツだってさすがに頭がなきや無理だ」

「頭を狙えってことか」

「映画や、ゲーム通りならな」

考えたくもなかった。

この世が映画やゲーム通りの世界になってしまったということ。

しかし、簡単に受け入れられるような事実ではないのだ。

「おい、上から水が…」

翔の言葉で窓に目を向ける。

どうやら屋上から水が流れている。

火事か？

可能性はある。

こんなパニックなんだ。  
火事だって起きる。

「いやああああ!!」

また廊下にひとつの叫び声が響き渡り、俺と翔は同時に目を移した。

数十メートル先に、座り込んでしまった女子生徒。

その近くには化け物もいる。

マズイ、あのままじゃ。

「おい、あれ…望月じゃ」

翔の言葉が発つせられたと同時に俺は咄嗟に行動に出ていた。

「望月！！伏せてろ！！」

バッドを振り上げ頭を狙う。

もうそうするしかないのだ。

俺達に躊躇いなんてあつてはならない。

「…んっ…やろおおおお！！」



鈍い音。

グチャツと生々しい音。

血が壁に飛び散り、俺も返り血を多少あびながらまだいる化け物に立ち向かう。

その時、背後に気配を感じた。

唸り声が近かった。  
しまった

ドンッ

ドアップされた化け物の顔が歪み、動きが止まるとバサツと音を立てて倒れた。

「翔…助かった」

「前の奴らも…やるぞ」

残りは二体。

無我夢中だった。

何も考えずに、無心でバッドを武器に立ち向かわなければならぬ奴らを相手にした。

もう、何が現実なのか。

今は夢なのか。

そうであってほしい。

そう願う俺を裏切るように立て続けに起こるパニック。

「……もう、いないな」

気づけば、転がる化け物。

数は四体。

俺と翔は息を上げながら慎重に辺りを見回しながら、息を付いた。

とりあえず何とかは、なった。

飛び散る血。

こんなの、現実で見るハメになるとは。

血って、こんななのか。

「……………望月、大丈夫か」

翔の言葉にビクツと反応しながら顔を上げる望月里緒<sup>もさつきりお</sup>。

クラスメートだ。

俺は望月と名前の名簿順が近かった為、席が前後だった。

話したことは皆無だったが、俺にとって望月は特別な存在だった。

座り込む望月は口を手で覆い隠して、信じられないと言った表情で化け物を見た。

肩が震えている。

無理もない。

あと少しで死を目前としていたのだから。

「……………望月」

かけてやる言葉が見つからない。

励ますことも、絶望から救ってやることもできない。

俺たちにもそんな余裕はないからだ。

「あ……大丈夫、ありがとう……」

そうは言うものの、とても大丈夫なようには見えなかった。

「望月、俺たちはここから逃げる。危険かもしれないけど……一緒に来るか？」

そう提案したのは翔だった。

俺も勿論そのつもりだった。

少しでも仲間を増やして、協力し合わなければ生きていけない。

そんな気がしてならなかった。

「……………うん、一緒に行く」

望月は大きな決断をしたように立ち上がって制服の汚れをはらった。

「とりあえず慎重に行動だ。逃げられる時は走れ、無理に相手にすることはない」

俺の言葉に翔と望月は深く頷く。

そして、歩き出そうとした時

「きゃあああ！！」

甲高い女の声。

「職員室だ！！」

声は近い。

俺たちは声のする方へと足を進めた。  
生きてる人間を助ける為に。

走った先に職員室が見えた。

男と女がひとりに…化け物が六体。

予想外の数に一瞬躊躇う。

しかし、叫びを聞きつけた他の生徒たちも続々と姿を現した。

「おい、毒島!!」

見かけた姿。

鞠川センセと一緒にいるのは、同じクラスの毒島ぶすじまさこ牙子。

それに後輩らしき男女も駆け付ける。

そのうちの男は、先程屋上に行く途中ですれ違った男だ。

「皆川に斎藤……里緒も」

望月と毒島はどうやら仲がいいらしい。

俺達七人は皆、顔を合わせた。

「来るなああっ！！」

ピンクの髪の女の叫び声とドリルが肉を裂く音が響く。

「俺たちはあいつらをやる！！」

「私は右の二匹をやる！！」

「麗！！」

「左を押さえるわ！！」

「うおりゃあああっ！！」

「やああっ！！」

「ほう……」

ドドッ、バキッ、ダダダダ……

「うおおらああー!!」

メキメキッ…バタッ

一瞬にして化け物が床に倒れた。  
どうやら、どうにかなった。

「高城さんっ、大丈夫？」

モップの柄を槍代わりに使って見事な槍術を駆使していた女が駆け寄る。

高城と呼ばれた女は返り血を浴びて全身に血が飛び散っている。

「みやもとお…」

顔を歪ませガタガタと震えている。

近くに転がる化け物の額には、ドリルによって擦り掘られた穴があった。

「皆川、斎藤、里緒。皆無事だったのか。本当に良かった」



毒島は笑顔を向けた。

「毒島も、鞠川センセも…良かった」

今この状況で、生きている人間に会う度にホッとしている気分になる。

出くわす殆どが化け物なのだ。

毒島は向き直る。

「鞠川校医は知っているな？わたしは毒島冴子。三年A組だ」

「小室孝、二年B組」

やっぱり屋上に行く時にすれ違った後輩だった。

小室孝…あいつは、校内放送で知らされる前に何かを知っていた？

あの形相は…間違いない。

「去年全国大会で優勝された毒島先輩ですよ！わたし槍術部の宮本麗です」

宮本麗：確か宮本は俺たちとタメなはず。

留年になったとか聞いたな。

それにしても銃術部とは。

だからか

「あ　えと　びB組の平野こ　コートです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9477m/>

---

学園黙示録-DEAD or ALIVE-

2010年10月8日11時33分発行